

今の彼女は三十五歳の人間の男ではない、
タマモという名前の十歳の……。

小さな妖狐の——女の子だ。



異世界転移。誰しもがそんな言葉を聞いたことがあるだろう、彼——アキラはそれとは無縁と思つていた。だが実際にはどうだ、いつも通り出勤しようとしたらいきなり異世界に飛ばされてはや三ヶ月。気がついた時にはその日暮らしの冒険家になつていた。

何で自分が飛ばされてしまったのか、安定した職を手にし社会人になつて十年は経つていたのに。……この世に神様がいたら今すぐにでも殴りたい。

冒険をすればするほど日本が本当に恋しい。今は夕方だ……彼が住む街の中世ヨーロッパ風の裏路地を歩いていると漂うパンの香ばしい匂い。おいしいそうだなと思うが……米が恋しい。おにぎりが食べたい、母のたくさん塩が付いたしょっぱいおにぎりを食べたい。ああ……と呟いてパンの匂いを感じつつ天を仰ぐ。

「——ねえ」

……具は梅干しがいいな。

……おかかもいいな、こんぶも食べたい。

「ねえ、お兄さん！」

……？ 革鎧が誰かに揺らされる。どこからの声だ……？ 声の主は彼の真下からだ、そこに首を向けると……。

「お兄さん、こんにちは〜！　こんばんはかな？」

……見知らぬ女の子が立っていた。

「……誰だい？」

その子は身長百三十センチぐらいの女の子だった。

肩のほうまで伸びているサラサラの銀髪に特徴的な狐耳と狐の尻尾を持っている。胸はわずかに膨らんでおり、腰回りにお尻と少女ながらも女性らしい曲線を描いており、興奮する人はするに違いない。だが彼はそんな趣味は無い。ニコニコと微笑みかけてくる彼女はとても可愛らしく、十年も経てば立派な美女になれる女の子だ。白のワンピースの裾が動く度に揺れて狐耳、尻尾も連動するように揺れる。もふもふ狐耳と尻尾が特に気になる。確か妖狐族の尻尾のモフリ具合は極上と聞いた、一度でも触ってみたいものだ。

「わたしタマモ！　よろしくね♪」

アキラだ、よろしく……。頬を掻きながらそう答える。この少女は何をしたい？　自分を油断させ周りから仲間が彼に襲撃をかけて金を奪う気だろうか。彼はそんな事を思いながら周囲を見渡すがそれらしい雰囲気はない。



「大丈夫だよお兄さん、ここにいるのはわたしとお兄さんだけ」

こちらを察してそんな事を言ってくる。それで――。

「……何か用かい？」

「お兄さん、両手を見せて！ うわあ、すごいね。ママがいっぱいでお兄さん頑張ったんだね」

手を取って彼の手のひらを見てはママをぶにぶに触れては一人で盛り上がっている。尻尾が左右にぶんぶん揺れる。嬉しい時の反応は犬と同じか……この子は冒険家の手が気になったただけだろうか。彼女の右手の甲にある紋は？ 女性の子宮を司っているように見えた。

「君、それは……」

「ああ、これ？」

少女は彼の目線に気付き、紋をゆつくりと撫でる。

「淫紋ってやつかな？ ちょっと前にね、サキュバスからよくわからない呪いを受けちゃったんだ。なんでもエッチな事が好きになっちゃうだとか？」

少女の口からスラスラと淫紋、サキュバス、呪い、エッチな事が好きになるというワードが溢れてちよつと引く。こんな少女に卑猥なセリフを言わせるだなんて……地球では絶対にありえない、一瞬助けようとも思ったが……彼にそんな余裕は無い。

「それでねお兄さん、もう私の身体はいらないし……ちようどよさそうだね♪」

身体はいらない？ 突然、彼女の狐耳と尻尾がピタッと止まり女の子の表情が変わる。

「お前の身体……気に入ったよ」

声質、雰囲気、ニタアと笑みを浮かべた表情。それは無垢な少女じゃない、奴隷商の男がする表情……！ この子から離れ——。

「……ボディチェンジ」

——彼の意識がぐにゃつとねじ曲がる。身体の内側から何かが押し上げられ、彼の三半規管が揺らされ気持ち悪くなる。もしも彼が満腹だったら戻していただろう。だが……その気持ち悪さは一瞬で無くなった。それどころか……ほどよく疲れていて気分が良い、まるで楽しくたくさん遊んだ子供のよう……。

何かおかしい。柔らかい手に握られていたのに、硬い手を握っている……？ 周囲の家と物や石畳が大きく見える。右手の甲には子宮の形をしたピンクの紋に……細く小さな指が目に入った。自分の身体が勝手に胸を突き出すような姿勢を取り、頭頂部と尾てい骨の重量感で危うく転倒しそうになる。頭頂部の重い部分に触れると……もふつとした最高の触り心地、そして音の聞こえる方向が顔の横ではなくそこから聞こえている事に気付く。

時折目にかかる銀色の何か。引つ張ると髪の毛が痛む。こんなに自分の髪の毛は長くないのに肩のほうまで伸びている……？　そしてこれも重い。

尾てい骨の重量物に触れた。それは程よく暖かくて……極上のもふもふだった。今まで味わった柔らかいモノが馬鹿らしくなるほどのもふもふ。そのもふもふに触れられている、と尾てい骨の神経が反応し、彼の脊髄……脳へその刺激を伝えていた。

白のワンピースの裾がひらつと動き、スースーした風通りが彼の下半身を冷やす。本来ならば股間の棒に風が当たる感覚があるのに何も感じず、直接風が股間周りを吹き抜けていく。

「なんだこ——っ！！！」

どこか舌つ足らず、高音の自分の声に思わず唇を両手で押さえる。両脇を閉めて驚くその姿は一瞬だけ本物の少女のように見えた。押さえた唇すらもぶにぶにで柔らかい、それどころか自分の身体はどこを触っても柔らかさの極上のような身体だ。おそろおそろ顔を見上げると……見慣れた、でもこの視点では初めて見る男がニタついた表情で——。

「どうしたんだタマモちゃん、自分の身体を調べてさあ……」

自分の声で、先程あの女の子が見せたニタアという表情で……目の前の男はそう言った。

「な……なんで、おれ……が」

「それだけ自分の身体を調べてもまだわかんないかな？」

……その言葉に『彼女』は改めて身体を見下ろした。自分の両肩にかかるヒモ状の衣類。胸部がわずかに膨らみ、スカートから伸びる脚は健康的で細いの……女性らしくむちむちした感じだ。胸部に右手で触れると……指がわずかに沈み込み、股間に触れると……いつもの棒が無い、感覚が無い。何度触れてもスカスカと空を切る。

「まさか……」

……入れ替わった。タマモと名乗る少女の魔法で……入れ替えられた。今の彼女はアキラという三十五歳の人間の男ではない、タマモという名前の十歳の……。

「これから一生、妖狐だな」

